

多機関連携による精神障がい者支援事業のコロナ禍における展開とその効果
～ピアサポーターのリカバリーストーリー集の作成と活用を通して～

○山崎未紗¹⁾ 塩田瑞月²⁾ 岡田菜々夏³⁾ 阿南裕子⁴⁾ 戸高由佳里⁵⁾ 救仁郷修⁶⁾ 椎葉茂樹¹⁾

延岡保健所¹⁾ 県長寿介護課²⁾ 県障がい福祉課³⁾ 日向保健所⁴⁾ 高鍋保健所⁵⁾ 元延岡保健所⁶⁾

I はじめに

令和2～4年度にかけて、多機関連携による精神障がい者支援事業（厚労省モデル事業）に取り組んだ。これは、精神科病院とグループホームにコーディネーターを置き、ピアサポーターの協力を得ながら地域移行を進めるとともに、精神障がい者が住み慣れた地域で安心して生活が送れるよう支援する取り組みである。精神科病院やグループホームからの退院・退所への意欲喚起においては、ピアサポーターとの交流が果たす役割は大きいものの、コロナ禍においては直接交流を行うことが難しい状況にあった。そのため、本事業の一環として、管内のピアサポーターの体験を紙面にまとめた「リカバリーストーリー集」（以下リカバリー集とする）を作成・活用し、その効果について検討したので報告する。

II 対象と方法

- 1 リカバリー集の作成とリカバリー要因の分析：ピアサポーター7名に入院中の思いや退院のきっかけ、現在の地域生活等について一人ずつインタビューを実施した。その後、個人が特定できないように配慮しながら、インタビュー内容を整理し、リカバリー集を作成した。また、各自がリカバリーに繋がった要因に関するキーワードを抽出し、カテゴリ化した。
- 2 リカバリー集の配布と効果の検討：A病院（精神科病院）の入院患者と職員（看護師）へリカバリー集を配付し、読了後に自記式アンケート調査を実施した。

III 結果

1 リカバリー集の作成とリカバリーに繋がった要因の分析結果

作成したリカバリー集の一例については図1のとおり。また、リカバリーに繋がった要因については「精神科医療機関における支援」「家族や知人の支え」などの8つのカテゴリに分類された（表1）。

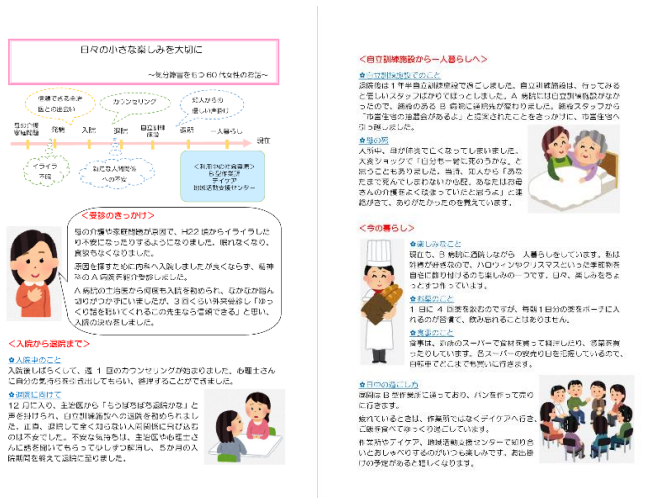


図1 リカバリーストーリー集の一例

2 リカバリー集の配付と読了後のアンケート結果

リカバリー集は、A病院の入院患者のうち、病棟職員が「退院意欲が喚起できると良い」と考えた11名と、その患者を主に担当する職員16名に配付した。リカバリー集を配付し

表1 リカバリーに繋がった要因

	カテゴリ	サブカテゴリ
①	精神科医療機関における支援	安心して治療にのぞめるような声かけ・関わり、本人の気持ちを尊重するような関わり
②	家族や知人の支え	心配していることが伝わるアイメッセージ、受診の勧め、退院を受け入れる姿勢
③	社会資源の活用	デイケア、作業所、地域活動支援センター、訪問看護、ショートステイ、ヘルパー
④	人との関わり	日中活動の場、出会い、入院患者同士の交流、相談支援専門員、反省の機会
⑤	病状の安定	服薬管理、通院継続、適切な治療
⑥	障がいを受け入れて自分らしく日々を楽しむこと	他者との会話、趣味による気分転換、自己研鑽
⑦	自分の役割の築き	家族としての役割、社会貢献、生活者としての自立
⑧	周囲へサポートを求められること	困ったら相談できる力、一人で抱え込まないこと

た全員のアンケート結果は以下のとおりであった。

(1) 入院患者 11 名 (入院期間：1 年未満 4 名、1～10 年 3 名、11～20 年 1 名、21 年以上 2 名、無記入 1 名)

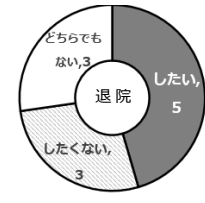
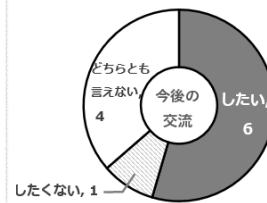
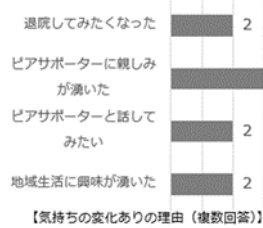
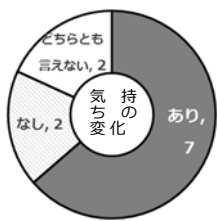


図 1 読了後の気持ちの変化の有無とその理由

図 2 ピアサポーターとの交流希望の有無

図 3 退院希望の有無

(2) 職員 16 名 (業務経験年数：1～10 年 6 名、11～20 年 7 名、21～30 年 3 名)

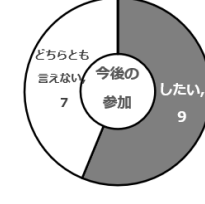
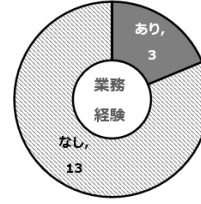
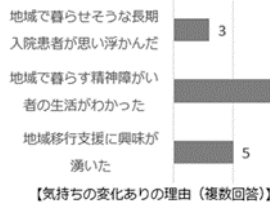
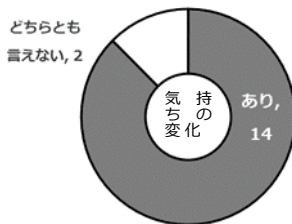


図 4 読了後の気持ちの変化の有無と変化の内容

図 5 地域移行支援の業務経験の有無

図 6 今後の地域移行支援への参加希望の有無

IV 考察

今回ピアサポーターへインタビューを行い、リカバリー集を作成したことで、それぞれの経験や思いが目に見える形となった。また、リカバリーに繋がった要因には、周囲の支援と共に、本人の障がい受容や役割の築きも重要であることが明らかになった。

読了後のアンケートでは、入院患者 11 名のうち 7 名に気持ちの変化があり、11 名のうち 4 名はその後退院に至った。当事者同士の体験的知識と感情風景の共有はリカバリーの促進因子¹⁾となることから、ピアサポーターの苦難や乗り越え方、日頃の生活で感じている楽しさ等を知る機会が、地域生活を身近なものとし、退院意欲を喚起する一助となったのではないかと考える。

一方で、職員 16 名のうち 14 名に、読了後、気持ちの変化があったものの、地域移行支援への参加希望には 7 名が「どちらとも言えない」と回答した。今回、リカバリー集が、職員の気持ちの変化にも影響を与えることは示唆されたが、さらに地域移行支援に携わりたいという認識を得るためには、どのようなアプローチが必要となるのか、さらなる課題の分析と方法の検討が必要であると考えられる。

新型コロナウイルス感染症の影響により直接の交流ができない状況下においては、媒体の一つとして作成したリカバリー集を用いることにより、入院患者とピアサポーターとの繋がりを継続することができた。今後も、本媒体を活用しつつ、直接交流する機会についても再開していきたい。

V 終わりに

精神障がい者が安心して生活を送るためには、地域全体の正しい理解と支援体制が不可欠である。精神障がい者の地域生活の実際やピアサポーターの存在について知ってもらうためにも、各種会議や研修会等において、ピアサポーターが自らの体験について話す場を設けるとともに本媒体を活用していきたい。

引用文献

- 1) 小田敏雄：精神障害者のリカバリー促進要因の検証～退院促進支援事業の当事者支援員と専門職へのインタビュー調査から第 2 報～、田園調布学園大学紀要第 5 号 2010 年度、71-89、2010